

トポス

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

2018年5月5日

1 トポス

定義. $P, Q: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ を関手とする. P が Q の部分関手 (記号で $P \subset Q$ と書く)
 \iff 自然変換 $\theta: P \Rightarrow Q$ で「各 $a \in C$ について $\theta_a: Pa \rightarrow Qa$ が包含写像になっているもの」が存在する.

$P \subset Q$ を部分関手とすると, 自然性より, $f: a \rightarrow b$ に対して次の図式が可換である.

$$\begin{array}{ccc} a & Pa & \xrightarrow{\subset} Qa \\ f \downarrow & Pf \uparrow & \uparrow Qf \\ b & Pb & \xrightarrow[\subset]{} Qb \end{array}$$

従って $Pf = Qf|_{Pb}$ となる. 特に $x \in Pb$ に対して $Qf(x) \in Pa$ である.

逆に $Q: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ を関手として, 集合族 $\{Pa\}_{a \in C}$ が次の条件を満たすとする:

- $a \in C$ に対して $Pa \subset Qa$.
- $f: a \rightarrow b$, $x \in Pb$ に対して $Qf(x) \in Pa$.

このとき, $f: a \rightarrow b$ に対して $Pf := Qf|_{Pb}: Pb \rightarrow Pa$ と定義すると P は Q の部分関手になることが容易に分かる.

定義. 有限完備な圏 C の部分対象分類子 (subobject classifier) とは, 組 $\langle \Omega, \text{true} \rangle$ であって, 以下の条件を満たすものをいう:

- (1) $\Omega \in C$ は対象で, $\text{true}: 1 \rightarrow \Omega$ は射である.

(2) 任意のモノ射 $f: a \rightarrow b$ に対して, ある射 $\chi_f: b \rightarrow \Omega$ が一意に存在して, 次の図式が pullback になる.

$$\begin{array}{ccc} a & \xrightarrow{!} & 1 \\ f \downarrow & & \downarrow \text{true} \\ b & \xrightarrow{\chi_f} & \Omega \end{array}$$

true を省略し, 単に Ω を部分対象分類子ということも多い.

定義. トポス (topos)^{*1}とは, 圏 E であって以下の条件を満たすものをいう:

- (1) E は有限完備である.
- (2) E は Cartesian 閉である. (「随伴関手」の PDF を参照.)
- (3) E は部分対象分類子を持つ.

命題 1. C を小圏とするととき $\widehat{C} = \mathbf{Set}^{C^{\text{op}}}$ はトポスである. 特に \mathbf{Set} はトポスである.

証明. まず \widehat{C} は完備だった (「極限」の PDF を参照). \widehat{C} が Cartesian 閉であることを示す.

※ $P, Q \in \widehat{C}$ とする. もし \widehat{C} が Cartesian 閉であれば $Q^P \in \widehat{C}$ が存在するが, このとき米田の補題により, $a \in C$ に対して

$$\text{Hom}_{\widehat{C}}(y(a) \times P, Q) \cong \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(a), Q^P) \cong Q^P(a)$$

とならなければならない.

$P, Q \in \widehat{C}$ とする. $Q^P := \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(-) \times P, Q) \in \widehat{C}$ と定義する. 余米田の補題 (「余米田の補題」の PDF を参照) により $Pa \cong \int^{c \in C^{\text{op}}} \text{Hom}_C(a, c) \times Pc$ だったことに注意

^{*1} 以下で述べる Grothendieck トポスと区別する為に, この意味のトポスを初等トポス (elementary topos) という場合がある. また, Grothendieck トポスを単にトポスと呼ぶ場合もある.

すると、任意の $X \in \widehat{C}$ に対して自然に

$$\begin{aligned}
\mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(X, Q^P) &\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, Q^P(c)) \\
&= \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, \mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(y(c) \times P, Q)) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(Xc, \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd)\right) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd)) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(\int_{c \in C^{\mathrm{op}}} Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd\right) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(Pd \times \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Xc, Qd\right) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Pd \times Xd, Qd) \\
&\cong \mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(X \times P, Q)
\end{aligned}$$

である (\mathbf{Set} が Cartesian 閉なので、 $Pd \times -$ が余極限と交換すること、特にコエンドと交換することに注意する)。よって \widehat{C} が Cartesian 閉と分かった。

部分対象分類子の存在を示す。 Ω を

- $a \in C$ に対して $\Omega(a) := \{P \in \widehat{C} \mid P \subset y(a)\}$ とする。
- $f: a \rightarrow b$ を C の射として $P \in \Omega b$ とする。 $u \in C$ に対して

$$(\Omega f(P))(u) := \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in Pu\}$$

と定めるとこれは部分関手 $\Omega f(P) \subset y(a)$ を与える。

\therefore) $l: u \rightarrow v$ とする。 $k \in (\Omega f(P))(v)$ に対して $k \circ l \in (\Omega f(P))(u)$ を示せばよい。今 $k \in (\Omega f(P))(v)$ だから $f \circ k \in Pv$ である。 $P \subset y(a)$ が部分関手だ

から

$$\begin{array}{ccc}
 u & Pu & \xrightarrow{\subset} \text{Hom}_C(u, a) \\
 \downarrow l & \uparrow -ol & \uparrow -ol \\
 v & Pv & \xrightarrow{\subset} \text{Hom}_C(v, a)
 \end{array}$$

が可換となり, よって $f \circ k \circ l \in Pu$ である.

これにより, $f: a \rightarrow b$ に対して写像 $\Omega(f): \Omega b \rightarrow \Omega a$ が定まる.

で定義する. これは関手 $\Omega: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ を与える.

\therefore 明らかに $\Omega(\text{id}_a) = \text{id}_{\Omega a}$ だから, $a \xrightarrow{f} b \xrightarrow{g} c$ に対して $\Omega(g \circ f) = \Omega(f) \circ \Omega(g)$ を示せばよい. 定義より $P \in \Omega c$, $u \in C$ に対して

$$\begin{aligned}
 (\Omega f \circ \Omega g(P))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in (\Omega g(P))(u)\} \\
 &= \{k: u \rightarrow a \mid g \circ f \circ k \in Pu\} \\
 &= (\Omega(g \circ f)(P))(u)
 \end{aligned}$$

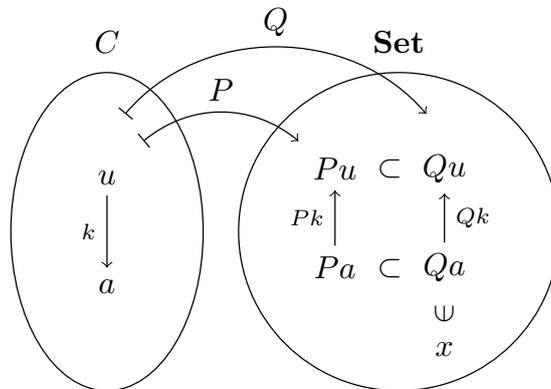
だから $\Omega f \circ \Omega g(P) = \Omega(g \circ f)(P)$ である.

true: $1 (= \Delta 1) \Rightarrow \Omega$ を $\text{true}_a(*) := y(a)$ で定める. これらが部分対象分類子を与えることを示そう.

まず $\theta: P \Rightarrow Q$ をモノ射とする. つまり $a \in C$ に対して $\theta_a: Pa \rightarrow Qa$ はモノ射 (つまり単射) である. これにより $Pa \subset Qa$ とみなす. $a, u \in C$, $x \in Qa$ に対して

$$\chi_a(x)(u) := \{k: u \rightarrow a \mid Qk(x) \in Pu\}$$

と定義する.



これは部分関手 $\chi_a(x) \subset y(a)$ を定義する.

∴) $l: u \rightarrow v$ を射とするとき, $k \in \chi_a(x)(v)$ に対して $k \circ l \in \chi_a(x)(u)$ となることを示せばよい. それには $Qk(x) \in Pv$ ならば $Q(k \circ l)(x) \in Pu$ を示せばよいが, それは明らか.

$$\begin{array}{ccc}
 u & Pu \subset Qu & \\
 l \downarrow & Pl \uparrow & \uparrow Ql \\
 v & Pv \subset Qv & \\
 k \downarrow & Pk \uparrow & \uparrow Qk \\
 a & Pa \subset Qa &
 \end{array}$$

よって $\chi_a(x) \in \Omega a$ であるから, $\chi_a: Qa \rightarrow \Omega a$ は写像である. これは自然変換 $\chi: Q \Rightarrow \Omega$ を定める.

∴) $f: a \rightarrow b$ を射とする. 次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc}
 a & Qa \xrightarrow{\chi_a} \Omega a & \\
 f \downarrow & Qf \uparrow & \uparrow \Omega f \\
 b & Qb \xrightarrow{\chi_b} \Omega b &
 \end{array}$$

即ち, $x \in Qb$ に対して, $y(a)$ の部分関手の等号 $\chi_a(Qf(x)) = \Omega f(\chi_b(x))$ を示せばよい. つまり $u \in C$ に対して $\chi_a(Qf(x))(u) = \Omega f(\chi_b(x))(u)$ を示す. これは定義より

$$\begin{aligned}
 \chi_a(Qf(x))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid Qk(Qf(x)) \in Pu\} \\
 \Omega f(\chi_b(x))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in \chi_b(x)(u)\} \\
 &= \{k: u \rightarrow a \mid Q(f \circ k)(x) \in Pu\}
 \end{aligned}$$

となるから成り立つ.

よって \widehat{C} における次の図式が得られた.

$$\begin{array}{ccc}
 P & \xrightarrow{!} & 1 \\
 \theta \downarrow & & \downarrow \text{true} \\
 Q & \xrightarrow{\chi} & \Omega
 \end{array}$$

これは可換である.

∴) $a \in C$ に対して $\chi_a \circ \theta_a = \text{true}_a \circ !_a$ を示せばよい. 即ち $x \in Pa$ に対して

$\chi_a(\theta_a(x)) = y(a)$ を示せばよい. χ の定義より, $u \in C$ に対して

$$\chi_a(\theta_a(x))(u) = \{k: u \rightarrow a \mid Qk(\theta_a(x)) \in Pu\}$$

だから, 任意の $k: u \rightarrow a$ に対して $Qk(\theta_a(x)) \in Pu$ を示せばよい. それは $\theta: P \Rightarrow Q$ が自然変換だから, 次の図式が可換となり成り立つ.

$$\begin{array}{ccc} Pu & \xrightarrow{\theta_u} & Qu \\ Pk \uparrow & & \uparrow Qk \\ Pa & \xrightarrow{\theta_a} & Qa \end{array}$$

この図式が pullback になることを示す. その為に次の図式の実線部分が可換であるとする.

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{!} & 1 \\ \sigma \downarrow & \tau \swarrow & \downarrow \text{true} \\ P & \longrightarrow & 1 \\ \theta \downarrow & & \downarrow \\ Q & \xrightarrow{\chi} & \Omega \end{array}$$

$a \in C$ とすると, $\chi_a \circ \sigma_a = \text{true}_a \circ !_a$ だから $x \in Xa$ に対して $\chi_a(\sigma_a(x)) = y(a)$ である. 即ち任意の $k: u \rightarrow a$ に対して $Qk(\sigma_a(x)) \in Pu$ となる. 特に $k = \text{id}_a$ と取れば $\sigma_a(x) \in Pa$ が分かる. 即ち, ある $\tau_a: Xa \rightarrow Pa$ が存在して $\theta_a \circ \tau_a = \sigma_a$ となる. この τ_a は自然変換 $\tau: X \Rightarrow P$ を与える.

∴) $f: a \rightarrow b$ を C の射として次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccccc} Xa & \xrightarrow{\tau_a} & Pa & \xrightarrow{\theta_a} & Qa \\ Xf \uparrow & & \uparrow Pf & & \uparrow Qf \\ Xb & \xrightarrow{\tau_b} & Pb & \xrightarrow{\theta_b} & Qb \end{array}$$

θ が自然変換だから, 右側の四角は可換である. また $\sigma_a (= \theta_a \circ \tau_a)$ が a について自

然だから外側の四角も可換である。従って

$$\begin{array}{ccc}
 Xa \xrightarrow{\tau_a} Pa \xrightarrow{\theta_a} Qa & & Qa \\
 \uparrow x_f & = & \uparrow Q_f \\
 Xb & \xrightarrow{\tau_b} Pb \xrightarrow{\theta_b} Qb & = \\
 & & \uparrow P_f \\
 & & Pa \xrightarrow{\theta_a} Qa \\
 & & \uparrow P_f \\
 & & Xb \xrightarrow{\tau_b} Pb
 \end{array}$$

となる。今 θ_a はモノ射だったから

$$\begin{array}{ccc}
 Xa \xrightarrow{\tau_a} Pa & & \\
 \uparrow x_f & & \uparrow P_f \\
 Xb \xrightarrow{\tau_b} Pb & &
 \end{array}$$

が可換となることが分かり、 τ は自然変換である。

よって $\theta \circ \tau = \sigma$ となる自然変換 $\tau: X \Rightarrow P$ が存在することが分かった。

逆に $\tau': X \Rightarrow P$ が $\theta \circ \tau' = \sigma$ を満たすとすると、 θ がモノ射だから $\tau' = \tau$ とならなければならない。よってこのような τ が一意であることが分かる。従ってこの図式が pullback であることが分かった。 \square

2 層

X を位相空間、 $\mathcal{O}(X)$ を X の開集合全体とする。 $\mathcal{O}(X)$ は包含関係により圏となる。関手 $P: \mathcal{O}(X)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ を X 上の (集合の) 前層というのであった。更に、開集合 $U \subset X$ と U の開被覆 $\{U_i\}_{i \in I}$ に対して次が equalizer となるとき、 P を層と言うのであった。(「例: 位相空間上の層」の PDF を参照。)

$$P(U) \xrightarrow{e} \prod_{i \in I} P(U_i) \begin{array}{c} \xrightarrow{p} \\ \xleftarrow{q} \end{array} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

ここで $e(x) := \langle x|_{U_i} \rangle_{i \in I}$ で、 p は $U_i \cap U_j \subset U_i$ から得られる射、 q は $U_i \cap U_j \subset U_j$ から得られる射である。

定義. C を圏とする。 $a \in C$ に対して、部分関手 $S \subset y(a)$ を a 上の sieve という。

例 2. $C = \mathcal{O}(X)$ の場合。 S を $U \in \mathcal{O}(X)$ 上の sieve とすると S は関手 $\mathcal{O}(X)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$

で, $V \in \mathcal{O}(X)$ に対して

$$S(V) \subset y(U)(V) = \text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(V, U) = \begin{cases} 0 (= \emptyset) & (V \not\subset U \text{ のとき}) \\ 1 (= \{*\}) & (V \subset U \text{ のとき}) \end{cases}$$

である. よって S は写像 $\mathcal{O}(X) \rightarrow 2 = \{0, 1\}$, 即ち部分集合 $S \subset \mathcal{O}(X)$ とみなせる. 更に, S が関手であることから $W \subset V$ に対して写像

$$\text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(V, U) = S(V) \rightarrow S(W) = \text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(W, U)$$

が存在する. 故に $V \in S$ (即ち $S(V) = 1$) ならば $W \in S$ (即ち $S(W) = 1$) でなければならない. また $V \not\subset U$ ならば $V \notin S$ である. 以上により, U 上の sieve S は部分集合 $S \subset \mathcal{O}(U)$ で, 条件

$$V \in S, W \in \mathcal{O}(U), W \subset V \implies W \in S \quad (1)$$

を満たすものと同一視できる.

$\{U_i\}_{i \in I}$ を U の開被覆とする. 即ち $U = \bigcup_{i \in I} U_i$ である. このとき

$$S := \{V \in \mathcal{O}(U) \mid \text{ある } i \in I \text{ が存在して } V \subset U_i\}$$

と定義すれば S は明らかに条件 1 を満たすので, S は U 上の sieve とみなせる. この S は $U = \bigcup_{V \in S} V$ を満たす.

逆に, U 上の sieve S が $U = \bigcup_{V \in S} V$ を満たすとする

$$S = \{V \in \mathcal{O}(U) \mid \text{ある } W \in S \text{ が存在して } V \subset W\}$$

となる. そこで, $U = \bigcup_{V \in S} V$ となる sieve を covering sieve と呼ぶ. □

U 上の sieve S は部分関手 $\theta: S \Rightarrow y(U)$ であった. これにより, 前層 P に対して写像 $i := \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(\theta, P): \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(y(U), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(S, P)$ が定まる.

定理 3. 位相空間 X 上の前層 P が層

\iff 任意の開集合 $U \subset X$ 上の covering sieve S に対して

$$i: \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(y(U), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(S, P)$$

が全単射を与える.

証明. $\{U_i\}_{i \in I}$ を開被覆とする.

$$E \xrightarrow{\subset} \prod_{i \in I} P(U_i) \xrightleftharpoons[q]{p} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

を p, q の equalizer とすると $E := \left\{ \langle x_i \rangle_{i \in I} \in \prod_{i \in I} P(U_i) \mid x_i|_{U_i \cap U_j} = x_j|_{U_i \cap U_j} \right\}$ である.
 S を $\{U_i\}_{i \in I}$ から定まる covering sieve とする. このとき全単射 $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow E$ が存在する.

$\therefore \theta \in \text{Hom}(S, P)$ とする. $S(U_i) = 1 = \{*\}$ だから $\theta_{U_i}(\ast) \in P(U_i)$ である. よって写像 $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow \prod_{i \in I} P(U_i)$ を $f(\theta) := \langle \theta_{U_i}(\ast) \rangle_{i \in I} \in \prod_{i \in I} P(U_i)$ と定義することができる. $f(\theta) \in E$ である.

$\therefore i, j \in I$ に対して $\theta_{U_i}(\ast)|_{U_i \cap U_j} = \theta_{U_j}(\ast)|_{U_i \cap U_j}$ を示せばよい. θ が自然変換だから

$$\begin{array}{ccc} S(U_i \cap U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_i \cap U_j}} & P(U_i \cap U_j) & & S(U_i \cap U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_i \cap U_j}} & P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow \\ S(U_i) & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & P(U_i) & & S(U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_j}} & P(U_j) \end{array}$$

は可換である. よって $\theta_{U_i}(\ast)|_{U_i \cap U_j} = \theta_{U_i \cap U_j}(\ast) = \theta_{U_j}(\ast)|_{U_i \cap U_j}$ となり成り立つ.

よって $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow E$ とみなすことができる. この f の逆写像 g が存在することを示せばよい.

$\langle x_i \rangle_{i \in I} \in E$ とする. $V \in \mathcal{O}(X)$ に対して $\theta_V: S(V) \rightarrow P(V)$ を次のように定める:

- $V \notin S$ のとき, θ_V は一意な射 $S(V) = \emptyset \rightarrow P(V)$ とする.
- $V \in S$ のとき, $V \subset U_i$ となる $i \in I$ を取り $\theta_V(\ast) := x_i|_V$ と定める.

($x_i|_{U_i \cap U_j} = x_j|_{U_i \cap U_j}$ だから, これは well-defined である.)

これは V について自然である.

∴) $V \subset W$ に対して次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc} S(V) & \xrightarrow{\theta_V} & P(V) \\ \uparrow & & \uparrow \\ S(W) & \xrightarrow{\theta_W} & P(W) \end{array}$$

$W \notin S$, 即ち $S(W) = \emptyset$ ならば自明だから $W \in S$ とする. この場合 $V \in S$ であるから, $\theta_W(*)|_V = \theta_V(*)$ を示せばよい. これは $x_i|_W|_V = x_i|_V$ ということだから成り立つ.

よって自然変換 $\theta: S \Rightarrow P$ が得られる. これにより $g(\langle x_i \rangle_{i \in I}) := \theta$ と定義する. つまり $V \in S$ に対して $g(\langle x_i \rangle_{i \in I})_V(*) = x_i|_V$ である. このとき

$$\begin{aligned} (g \circ f(\theta))_V(*) &= (g(\langle \theta_{U_i} \rangle_{i \in I}))_V(*0) = \theta_{U_i}(*)|_V = \theta_V(*) \\ f \circ g(\langle x_i \rangle_{i \in I}) &= \langle g(\langle x_i \rangle_{i \in I})_{U_i} \rangle_{i \in I} = \langle x_i \rangle_{i \in I} \end{aligned}$$

だから $g = f^{-1}$ である.

よって $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow \prod_{i \in I} P(U_i)$ とみなせば

$$\text{Hom}(S, P) \xrightarrow{f} \prod_{i \in I} P(U_i) \xrightleftharpoons[q]{p} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

は equalizer である.

次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{f} & \prod_{i \in I} P(U_i) \xrightleftharpoons[q]{p} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow i & & \uparrow e \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) \end{array}$$

この図式の左の四角は可換である.

∴) $\theta \in \text{Hom}(y(U), P)$ を取る. θ に対応する $x \in P(U)$ は $x = \theta_U(\text{id}_U)$ で与えられるから, θ を右回りで写したものは $\langle \theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} \rangle_{i \in I}$ になる. 一方, 左回りで写すと

$f \circ i(\theta) = \langle \theta_{U_i}(\ast) \rangle_{i \in I}$ になるから $i \in I$ に対して $\theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} = \theta_{U_i}(\ast)$ を示せばよい。
 θ が自然変換で $U_i \subset U$ だから次が可換である。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(U_i, U) & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & P(U_i) & & \ast & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & \theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} \\ \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow \\ \text{Hom}(U, U) & \xrightarrow{\theta_U} & P(U) & & \text{id}_U & \xrightarrow{\theta_U} & \theta_U(\text{id}_U) \end{array}$$

よって $\theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} = \theta_{U_i}(\ast)$ が分かる。

(\implies) S を開集合 $U \subset X$ 上の covering sieve とする。 $\{V\}_{V \in S}$ は U の開被覆であるから、上記の議論により次の図式を得る。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{f} & \prod_{V \in S} P(V) & \xrightarrow[p]{q} & \prod_{V, W \in S} P(V \cap W) \\ \uparrow i & & \uparrow e & & \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) & & \end{array}$$

仮定より e が equalizer となるから i は同型である。

(\impliedby) $\{U_i\}_{i \in I}$ を U の開被覆とする。これから得られる covering sieve S を取り、上記の議論から次の図式を得る。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{c} & \prod_{i \in I} P(U_i) & \xrightarrow[p]{q} & \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow i & & \uparrow e & & \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) & & \end{array}$$

i が同型だから e が p, q の equalizer となる。よって P は層である。 □

これを使い、一般の圏 C 上の前層が層であることを定義することができる。その為には、まず $c \in C$ 上の sieve S がいつ covering sieve になるかを定めなければならない。

定義. C を圏とする。各対象 $a \in C$ に対して、 a 上の sieve からなる集合 $J(a)$ が与えられ、以下の条件を満たすとき、 J を C の Grothendieck 位相という。

- (1) $y(a) \in J(a)$ である。 ($y(a)$ を maximal sieve と呼ぶ。)
- (2) $f: a \rightarrow b$, $S \in J(b)$ に対して $\Omega f(S) \in J(a)$ である。

(3) $S \in J(a)$, R が a 上の sieve で「任意の $f \in S(b)$ に対して $\Omega f(R) \in J(b)$ 」ならば $R \in J(a)$ である.

また $J(a)$ に含まれる sieve を covering sieve と呼ぶ. 圏 C の Grothendieck 位相 J が与えられたとき, 組 $\langle C, J \rangle$ を景 (site) という.

定義. 景 $\langle C, J \rangle$ 上の層とは, 前層 $P: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ であって, 任意の $c \in C$ と $S \in J(c)$ に対して $i: \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(c), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{C}}(S, P)$ が全単射となるものを言う. $\langle C, J \rangle$ 上の層全体がなす \widehat{C} の充満部分圏を $\text{Sh}(C, J)$ と書く.

例 4. $C = \mathcal{O}(X)$ の場合. $J(U) := \{S \mid S \text{ は } U \text{ 上の covering sieve}\}$ と定義すると J は $\mathcal{O}(X)$ の Grothendieck 位相になる.

∴ maximal sieve, 即ち $S = \mathcal{O}(U)$ は U 上の covering sieve であるから条件 1 は成り立つ.

次に $f: U \rightarrow U'$ として S を U' 上の sieve とする. $V \in \mathcal{O}(X)$ に対して

$$(\Omega f(S))(V) = \{k: V \rightarrow U \mid f \circ k \in S(V)\}$$

だから

$$V \in \Omega f(S) \iff V \subset U \text{ かつ } V \in S$$

である. よって条件 2 は「 S が U' 上の covering sieve ならば $S \cap \mathcal{O}(U)$ は U 上の covering sieve である」という条件となり, 成り立つ.

最後に, S を U 上の covering sieve, R を U 上の sieve とする. 条件 3 の「任意の $f \in S(b)$ に対して $\Omega f(R) \in J(b)$ 」は「 $V \in S$ ならば $R \cap \mathcal{O}(V)$ は V 上の covering sieve である」という条件になり, この条件が成り立つとき R は covering sieve である, というのが条件 3 である. 故に成り立つ.

この景 $\langle \mathcal{O}(X), J \rangle$ 上の層は, 定理 3 より位相空間 X 上の層となる. □

定理 5. $\text{Sh}(C, J)$ はトポスである. □

定義. ある景 $\langle C, J \rangle$ に対する $\text{Sh}(C, J)$ と圏同値になる圏を Grothendieck トポスと呼ぶ.

参考文献

[1] S. Mac Lane and I. Moerdijk, Sheaves in Geometry and Logic, Springer, 1992